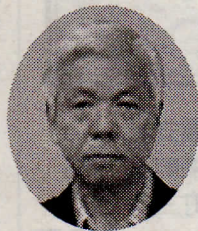


# 中経論壇

経営支援NPOクラブ理事

吉田 仁



ワデニムの及川社長のトークを聞き、災害を乗り越える姿に感動を覚えた。

昨年、映画「シン・ゴジラ」と「君の名は。」が話題を呼んだ。傾向は全く違うが、双方のラストの場面から感じたのは、破壊された街から立ち上がる人間の強さである。先日、内田洋行が開催する60回目、内田洋行が主催する60回目の屋台大学で、東日本大震災の負の遺産を生かして再生を果たした、気仙沼のオイカ

が日本一であるが、「くちばし」の部分には廃棄物として捨てていた。これを砕いて綿花と組み合わせ系にし、炭にしたものを染料として、数年の試行錯誤を重ねてデニムにした。スボンやバッグを製作し、新しいブランドとして、ヨーロッパにも輸出されている。このきっかけが、家屋を失った住民との共同生活だった。

## 災害を乗り越える知恵

及川社長は高台にあって倒壊を免れた工場を、被災者150人に提供し、臨時避難所に指定してもらい、共同生活を始めた。すべての人が一つの役割を持つというルールを作り、活気を失わない前向きなコミュニケーションづくりを目指した。また、地域の人々の自立のための手段として、デニム工場でも働いてもらうことした。

皆、縫製業の素人であることから、当初は難しい曲線のデザインは避け、四角をベースにした製品を造り、技術を習得してもらった。震災前から、家事との両立のために、主婦の残業は行わないようにしていたが、被災者の働き方には特に配慮されたようである。

廃材の活用もユニークである。漁師の町だけに大漁旗がたくさんあったが、津波で破れてしまった。それをバッグのアクセントとして使い、彩りを添えるデザインにした。これも災害で破損したものを、すべて活用しようという強い思いから実行した。

及川社長は、津波により廃墟と化した街を見て、非常に衝撃を受けたが、そこから立ち上がろうとしたとき、人への思いやり、地域の特性を生かすこと、不用品の再利用など、これまでとは違う価値観が見えてきたという。災害を体験した人の「生きていれば、道は開ける」という言葉に重いものを感じた。

メカジキの「くちばし」から造るデニム